

原采蘋著『西遊日歴』について

—九州文人との交流（2）天草を中心に—

小谷 喜久江

日本大学大学院総合社会情報研究科修了生

Hara Saihin's *Saiyu Nichireki*

—Fellowship among Kyushu region poets (2) On Amakusa island—

KIKUE Kotani

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies, PhD

Amakusa is below the Shimabara peninsula. In 1856-57, Hara Saihin enjoyed a lengthy stay on Amakusa while traveling in Kyushu. She stayed about one year, on and off, traveling to Kagoshima for two months. She stayed with Nagano Kurobei, the head of Shikaki village, who was also a disciple of Hirose Tansou. Kurobei also had a beach house in Shimago village, facing Mount Unzen across the Ariake sea. The beach house was named “Taigakuro,” scholars and poets came to visit from all over Japan.

Saihin composed 153 poems while on Amakusa, as she wandered around scenic spots and met people. I will examine Saihin's fellowship on Amakusa through her poems and propose why she visited the island and stayed so long in the tiny village of Shikaki.

1.はじめに

原采蘋は島原でひと夏を送った後、海を渡って天草島に拠点に移した。天草には頼山陽がかつて長崎から富岡に渡ったが、采蘋の行程は詩からは判断が出来ない。采蘋は島原にいたときに一度長崎に遊んでおり、さらに『漫遊日歴』によれば、天草滞在中も閏五月六日から十一日まで長崎に旅行し、その帰路富岡にしばらく滞在している。そのため富岡で詠まれた詩は多く残されているが、『西遊日歴』の詩の順序は必ずしも行程とは一致していないため、道程を判断することは難しい。

天草では志柿（現在の志柿町）の里正で、広瀬淡窓門人の永野九郎兵衛の家を拠点に安政三年(1856)の秋から安政四年の夏まで約一年間滞在した。その間、鹿児島に足をのばし、二ヶ月間滞在している。この間の滞在に関しては詳細な日記が残されており¹、『西遊日歴』の詩と照合することで、鹿児島での

采蘋の動向はかなりはっきりとつかむことができる。

本稿では紙面の関係上、安政三年の暮れまでの志柿滞在の詩を紹介するにとどめる。天草滞在中の詩は153詩にも上るためである。采蘋が愛した天草島で詠まれた彼女の詩を通して、江戸末期の天草の文化的状況を考察し、采蘋をひきつけた要因を探っていきたい。

2.天草滞在中の詩

大矢氏掘出土中釵為妙現祠神體囑余作詩 大矢氏土中より掘出したる釵、妙現祠神体と為し、余に作詩を囑む

幾年埋没在泥沙
不是龍将是莫邪

神物元非腰下物
願將威徳伏幽遐

幾年 埋没し 泥沙に在り
是れ龍にあらずんば將た是れ
莫邪ならん

神物 元 腰下の物に非らず
願はくは 威徳を將つて 幽遐
に伏せん

¹ 『漫遊日歴』

○釵 つるぎ。○莫邪 古の名剣の名。○神物 神秘的なもの。○腰下 腰のあたり。○威徳 おごそかで冒しがたい徳。○幽遐 奥深いさま。

宿大矢氏宅² 大矢氏宅に宿る
 臥龍岡上巴江濱 臥龍岡の上 巴江の浜
 託宿風流賢主人 宿を託す 風流 賢主人
 身異官私齊是客 身は官私を異にすれども 齊しく是れ客
 談由風月意相親 風月を談ずるに由りて 意相親しむ
 他郷情味憐同臭 他郷の情味 同臭を憐む
 多日歆留屬小春 多日 歆びて留り 小春に属く
 禿筆將酬知遇厚 禿筆 將に酬ゆ 知遇の厚きに
 昏昏早已醉君醇 昏昏として早已に君が醇に酔ふ

○臥龍岡 天草郡苓北町の富岡半島のこと。○巴江 富岡の曲崎によってできた湾で、巴浦・袋の浦ともいう。○昏昏 意識がはっきりしないさま。

次韻小松靜處³見贈 小松靜處の贈らるるに次韻す
 神情皎若雪中梅 神情 皎きこと雪中の梅の若し
 歌曲寧無風月媒 歌曲寧んぞ風月の媒無からんや
 一々不煩公瑾顧 一々 公瑾の顧るを煩はせず
 多々已辦士衡才 多々 已に 辦士 衡才
 作文莫使天機泄 作文 天機を泄らしむ莫れ
 觸忌恐逢造物猜 觸忌 造物の猜に逢ふを恐る
 何用推敲費詩思 何ぞ推敲を用ひて詩思を費さん
 滿腔錦繡自由裁 滿腔の錦繡 自由に裁す

○神情 こころもち。○公瑾 三国呉、周瑜の字。○衡才 選ばれた人材。○觸忌 忌諱にふれる。○天機 自然のからくり。神秘。天の秘密。○滿腔 心から。○錦繡 詩文をいう。

天草客舎寄長崎長川小曾根二子 天草客舎にて、
 長崎の長川、小曾根二子に寄す
 忽向西風感舊遊 忽として西風に向ひ旧遊を感じ

重來瓊浦訪名流 重ねて瓊浦に来つて名流を訪ふ
 逢時一瞥如春夢 逢ふ時は 一瞥 春夢の如し
 別後幾多兼旅愁 別後 幾多 旅愁を兼ね
 萍水無根流寓夜 萍水 根無し 流寓の夜
 屋梁有影月明秋 屋梁 影有り 月明の秋
 人生為女君憐取 人生 女と為りて 君の憐れみ
 を取る
 咫尺烟波憚去留 咫尺たり 烟波 去留を憚る

○流寓 流浪し他郷に住む。○屋梁 屋根。○咫尺 ごく近い距離。

采蘋は二十六歳の時、半年ほど長崎に滞在した。その時に知り合った名流を懐かしみ、今回の旅の合間にも二度ほど長崎を訪れている。

次韻鎮道寺⁴上人見贈 鎮道寺上人の贈らるるに次韻す
 近似書家執筆忙 近似す 書家 執筆忙し
 風流未得互承當 風流 未だ互ひに承當を得ず
 清間半日敲蕭寺 清間 半日 蕭寺を敲く
 同賞東籬霜後芳 同に賞む 東籬 霜後の芳

○近似 良く似ている。類似したさま。○承當 あたる。あてはまる。○清間 人のひまなとき。○蕭寺 寺の通称。○東籬 東のまがき。

疊前韻和小松靜處 前韻に疊ねて小松靜處に和す
 探勝不辭忙裏忙 探勝 辭せず 忙裏の忙
 秋冬光景最郎當 秋冬の光景 最も郎当たり
 醉歸僚倒斜陽路 醉歸し僚(とも)に倒る 斜陽の路
 愛君清吟衝口芳 君が清吟を愛す 口に衝きて芳し

○探勝 景勝地を求めて訪ねる。○郎當 風俗など

² 富岡府吏。頼山陽も富岡では大矢元周と会っている。

³ 富岡陣屋付医者か。

⁴ 苓北町富岡にある浄土真宗のお寺。第十四世の住持和氣良活は広瀬淡窓門人で、後亀井南冥に就いて学ぶ。上人とは第十三世のことをさすか。

が腐敗するさま。疲れるさま。だらしないうさま。

宮田瀑布⁵

峭壁千尋瀑布懸 峭壁 千尋 瀑布懸る
 觀雄五月雨餘天 雄を觀る 五月 雨余の天
 金鱗將向龍門躍 金鱗將に龍門に向ひて躍んとす
 風卷狂瀾起水烟 風は巻き 狂瀾 水烟を起こす

○峭壁 厳しく切り立つ崖。○龍門 山西・陝西両省の境にある黄河の激流の地。ここを登りきった魚は竜になると伝えられている。○狂瀾 逆巻く波濤。

臨巴樓⁶

臨巴閣上放吟眸 臨巴閣上 眸に放吟す
 月出海嶠移斗牛 月 海嶠に出で 斗牛に移る
 泛宅人行明鏡裡 泛ぶ宅 人 明鏡の裡に行く
 思郷涙灑大刀頭 郷を思ひ 涙 大刀の頭に灑ぐ
 兼葭秋老隨陽鳥 兼葭 秋老け 陽鳥に隨ふ
 絲竹聲喧近水樓 絲竹 声喧く 水樓に近し
 二十年餘東武客 二十年余 東武の客たり
 西來又此作遲留 西來すれども又此れ遲留と作る

○斗牛 二十八宿のうちの斗宿と牛宿。○泛宅 船の異名。○陽鳥 陽気に随う鳥。鴻雁などの類

四君子

山中多刺棘 山中 刺棘多ければ
 移根伴玉人 根を移して 玉人に伴ふ
 更慕陶清節 更に陶の清節を慕へば
 此君來ト隣 此の君 来って隣をトふ

○四君子 絵画の題材としての梅・竹・蘭・菊の総称。○玉人 玉のように皎潔な人をいう。ここでは梅のこと。○清節 けがれの無い節操。○此君 竹の異称。王徽子（字は子猷）が竹をさして、此の君と言った故事による。○ト隣 住居を定めるのに、まず近隣の善し悪しをうらなう。

又

汾水中流楚澤潯 汾水の中流 楚の沢潯
 湘臣之佩漢皇吟 湘臣之を佩び 漢皇を吟ず
 王猷瀟灑江蘋瘦 王猷瀟灑にして 江蘋瘦せり
 併得寫真君子心 併せ得て 真を写す 君子の心

○汾水 山西省の中部を流れ川津県で黄河に注ぐ。○湘臣 屈原のこと。君子は香草を佩び物とした。○漢皇 唐の詩人は、唐の皇帝のことを直接歌うのを避けて「漢皇」の語を借りた。○王猷 王子猷は王羲之の子。○瀟灑 さっぱりして清らか。雅なさま。

天草遊中登高望西洋⁷ 天草遊中 登高して西洋を望む

扶桑地盡頭 扶桑 地盡くる頭（ほとり）
 登高極遠望 登高 遠望を極む
 眼界無物遮 眼界 物の遮る無く
 落日在空洋 落日 空洋に在り
 遐想神聖國 遐かに想ふ 神聖の国
 葵心傾夕陽 葵心 夕陽に傾き
 滿清一猾夏 滿清 一たび夏を猾す
 文物非舊章 文物 旧章に非ず
 加之英夷暴 加之（しかのみならず）英夷の暴
 荼毒及三殤 荼毒 三殤に及ぶ
 防禦無男子 防禦 男子無く
 貞烈纔劉娘 貞烈 纔かに劉娘あるのみ
 髡頭辦髮客 髡頭 辦髮の客
 畏犬如虎狼 犬を畏ること 虎狼の如し
 人生僅知字 人生 僅かに字を知れば
 慷慨憂難忘 慷慨して 憂ひ忘れ難し
 此是海外事 此れは是れ 海外の事
 徒勞九回腸 徒らに勞す 九回の腸

○葵心 ひまわりが太陽に向かって傾く。人を仰ぎ慕うことに喩える。○荼毒 害毒を与えること。○三殤 未成年で死んだ者の三つの区別。「傳曰、年十九至十六爲長殤、十五至十二爲中殤、十一至八歳爲

⁵ 上島の倉岳町宮田、砥石川上流の五月雨滝のことか。

⁶ 富岡の巴湾（富岡湾）を臨む樓閣。

⁷ この詩はすでに拙稿（学位論文）250 頁に紹介した。
<http://hdl.handle.net/11263/230> (2015/01/19)

下殤。」『儀禮』「喪服」○劉娘 乍浦の劉氏の娘がイギリス兵の凌辱に抗して死を選んだ悲劇。○髻頭 辦髮 頭髮の周囲を剃り、中央に残った髪を編んで後ろに長く垂らす満州族の習俗。○畏犬如虎狼 犬程度の者を獐猛な虎狼のように恐れる。犬は西洋人を指している。○人生・慷慨の二句 字を知り、学問が進むと、物事の理解が深まり、かえって心配や悩みが多くなる。「人生識字憂患始、姓名羸記可以休。」蘇軾「石蒼舒醉墨堂」○九回腸 憂悶の甚だしいことを形容する。

富岡眺望

十里沙堆緑一條 十里の沙堆 緑一條
琉璃中断巴江潮 琉璃 中断す 巴江の潮
富春岡上真圖畫 富春 岡上 真に図画
除却黄倪誰敢描 黄倪を除却して誰か敢て描かん

○除却 除外する。○黄倪 黄公望と倪瓚。

臥龍岡⁸

龍尾蜿蜒蟠海中 龍尾 蜿蜒として 海中に蟠る
匯成巴字泊船篷 巴の字に匯り成して船篷に泊る
外夷若有窺邊激 外夷の 若し 辺を窺ひて激し
きこと有らば
卷起雲濤鎮火攻 雲濤を巻き起して火攻を鎮めん

○蜿蜒 蛇や龍などが身をくねらせて這って進むさま。屈曲しながらうねうねと長く続くさま。○巴字 水流の曲折しているさま。○匯 あつまる。○船篷 竹や布で作った覆い。とま。

贈愛石人 石を愛する人に贈る

知君珍惜非碌碌 君知るや 珍惜するは 碌碌に非ざるを
一卷山形自然伏 一卷の山形 自然に伏す
遮莫衆人喚做顛 遮る莫かれ 衆人 喚びて顛と做すを
石獨不言堪怡目 石 独り言はず 目を怡(よろこば)すに堪ふ

○珍惜 惜しんで大切に。○碌碌 玉石の美しいさま。○顛 精神が正常でない。

管窺亭眺望里正藤田天府需 亭在火島⁹ 里正藤田天府の需めにて、管窺亭にて眺望す 亭在火島
島隸荅州僅容刀 島隸 荅州 僅に容刀のみ
別闢乾坤跨巨鰲 乾坤を別けて闢き 巨鰲を跨ぐ
長日如年人亦壽 長日 年の如し 人亦た寿なり
不似塵世更怛怛 塵世に似ず 更に怛怛たり
風俗天真無虚礼 風俗は天真 虚礼無く
俯仰何曾学桔槔 俯して仰ぐ 何んぞ曾て 桔槔を学ばん

南有辨天西龍岳 南に弁天 西に龍岳有りて
四面光景誰得描 四面の光景 誰か描き得ん
爽氣蒼然奇峯歛 爽氣 蒼然として 奇峯歛む
希音縹緲明月高 希音 縹緲として 明月高し
聞説く 東肥 海上の火
古来 知らず 誰か知音あるを
七月 念ずること九たび 烟波は隠る

百千 相映じて 何んぞ具ふること夥し

今我妄言人信不 今我に妄言あるも 人信ぜず
以爲龍王秉燭遊 龍王と為るを以て 燭を乗りて遊ぶ

萬幾餘暇出具關 萬幾の余暇 具に閑を出づ
潮頭御筵試賡酬 潮頭の御筵 賡酬を試す
魚也鼈也各應制 魚や 鼈や 各おの制に応ず
揆天才子雨露稠 揆天の才子 雨露稠し
龍宮深警長夜飲 龍宮 深く警む 長夜の飲
觀樂 未だ央(つき)ざるも 暁に先じて休む

海上雲烟趣非一 海上の雲烟 趣は一に非ず
朝暮變幻難具述 朝暮 變幻し 具に述べ難し
君占其騰正其里 君其の騰るを占ふは正に其の里
撫字村落如親暱 撫字の村落 親暱の如し
揚奉す 仁風 民膏を養ふ
官家寧んぞ一字の褒無からんや

⁸ 富岡の別称。

⁹ 火島(ヒノシマ)とは天草上島龍ヶ岳町樋島のこと。

○容刀 刀の形はなしていても刃がなく儀容に備えるだけのものである。飾り太刀。○乾坤 天と地。○巨鰲 大亀。古代の中国では、大地は大亀の上に載っているとされた。○長日 昼の長い日。夏の日。○惓惓 久しいさま。○桔槔 はねつるべ。人に従うばかりのことを喩えている。「且子獨不見夫桔槔者乎。引之則俯、舍之則俯。彼人之所引、非引人也。」『莊子』「天運」○希音 すばらしい音声。○妄言 うそ。でまかせ。○秉燭遊 短い春の夜を惜しみ、ともしびをともして夜まで遊ぶこと。「古人秉燭夜遊、良有以也。」李白「春夜宴從弟桃花園序」○萬幾 天子の治める政事をいう。○賡酬 詩歌の贈答をする。○未央 夜などがまだ半ばに達していないさま。○具述 詳しく述べる。○揆天 光が天を照らす。○長夜飲 徹夜で酒宴をし、夜が明けても戸を開けず、火をともして飲み続けたという殷の紂王の故事にちなむ。○親暱 非常に親しいさま。むつまじい。○奉揚 宣揚する。○撫字 部下や民衆を可愛がる。子供を育てる。○民膏 人民があぶらあせを絞って得た収入。

對岳楼

對岳岑楼遊觀美 對岳の岑楼 遊觀の美
曾在江都已傾耳 曾在江都に在りて 已に耳を傾かす
歸寧事遂事勝遊 歸寧し 事 遂に 勝遊に事ふ
況於處聞情何已 況んや 聞く處 情何んぞ已ん
一葦航来求矚目 一葦 航来して 矚目を求む
主人有舊相看喜 主人 旧有り 相看て喜ぶ
引余直上海上楼 余を引きて 直に上の海上の楼
一一説示一枝指 一一 説示す 一枝の指
正北乃是稱不二 正北 乃ち是れ 不二と稱す
獨立霽間冠筑紫 獨立して 霽間 筑紫に冠たり
嶺頭常餘太古雪 嶺頭 常に余る 太古の雪
六月鑿冰冷徹随 六月 氷を鑿ちて 冷徹随ふ
夕照西沈海門閉 夕照 西に沈み 海門閉づ
千皴漁火星相似 千皴の漁火 星に相似たり
海波猶勝世波險 海波に猶ほ勝りて 世の波險し
仰養父母俯妻子 父母を仰ぎ養ひ 妻子を俯す
君不見佛嶺殘夜月 君見ずや 嶺に仏ふ 殘夜の月

古來閱盡幾生久

憶昨兩虎鬪爭地 英雄一去不可起
又不見寬永妖賊乱 援兵遲疑故懈怠
兄弟輕死如鴻毛 名譽泰山傳千載
墳上双松枝相連 夜雨肅肅哭冤鬼
一治一乱夢一場 古今齊是如流水
春風驅寒晴靄浮 山嶺櫻花吐芳蕖
花乎雲乎難暫駐 杜鵑聲中春杳矣
葉底全無一點紅 草木欣欣新翠紫
水雲晃樣天欲雨 樓閣層疊海上市
倏忽放晴日亦暮 多少歸帆聞歎乃

四時奇觀趣不凡 使人耽樂忘鄉里

主人責余以詩文 諸彦言之已有斐
菲才固辭不能得 執筆瞋睡憑烏几
應接多多難爲懷 精衛喚醒水之涖

○遊觀 遊覧。○一葦 小舟を喩えたもの。○岑楼 高くそびえている山。○歸寧 家に帰り、喪に服す。○鑿つ 穴をあける。○寬永妖賊亂 島原の乱。○故懈怠 ことさらに怠る。故意に怠る。○鴻毛 物の極めて軽いことを喩えている。○泰山 非常に価値のあること。鴻毛と対になる。○雙松 二本の松は兄弟を喩える。○冤鬼 恨みをのんで死んだ亡霊。○晴靄 晴れたもや。○葉底 葉

古來閱み尽し幾(いくばく)も生じて久し

昨を憶ふ 兩虎 鬪争の地 英雄一たび去りて起つ可からず
又見ず 寬永 妖賊の乱 援兵 遲疑して 故に懈怠す
兄弟 輕死すること鴻毛の如し 名譽の泰山 千載に伝ふ
墳上の双松 枝相連る 夜雨 肅肅として 冤鬼を哭す
一治一乱 夢一場 古今 齊しく是 流水の如し
春風 寒を驅けて 晴靄浮く 山嶺の桜花 芳蕖を吐く
花や 雲や 暫しも駐り難し 杜鵑 声中 春杳かなり
葉底 全く一点の紅も無し 草木 欣欣として翠紫新たなり
水雲の晃樣天は雨ふらんと欲し 樓閣 層疊す 海上の市
倏忽として 放晴 日亦た暮る 多少の歸帆聞きて乃(なんじ)を歎かす

四時の奇觀 趣不凡なり 人をして 耽樂して 郷里を忘れしむ

主人余を責むるに詩文を以てす 諸彦の言 已に斐(あや)有り 菲才固辭するも 得るあたはず
執筆 瞋睡 烏几に憑る 応接 多多 懷を為し難し 精衛 喚びて醒す 水の涖

の下。○欣欣 かわるがわる。○水雲 水上に出る雲。○海上市 蜃気楼。○倏忽 たちまち。○放晴 空が晴れること。○瞌睡 疲れて眠くなる。○烏几 黒皮の飾りのある小机。○精衛 伝説上の鳥。炎亭の娘が、海岸で溺死し、化してこの鳥になったという。「發鳩之山、其上多柘木、有鳥焉、其狀如鳥、文首白喙赤足、名曰精衛。其鳴自詠、是炎帝之少女、名曰女娃、女娃游於東海、溺而不返、故爲精衛、常銜西山之木石、以堙于東海。」『山海經』「北山經」。○涘 水辺。岸。

対岳楼は弘化元年に大嶋子村（天草市島子）に建てられた別荘で、里正永野九郎兵衛抱雪（1806-1864）の二男が大嶋子村の大地主、三好屋宮崎家に養子にいったことから、雲仙岳と対峙した三好屋の敷地内に九郎兵衛が立てたものである¹⁰。采蘋の詩に、「曾在江都已傾耳」とあるように、その名は遠く江戸の文人たちに広まり、そこを訪れた文人は草場珮川、頼三樹三郎、斉藤拙堂らに代表される一流の文人・儒者が集まった。もちろん永野九郎兵衛の師である広瀬淡窓も訪れている。現在は跡地にアコウの木が往時のまま残され、空き地となっているが、その景観は詩に書かれた如くである。弘化元年に岸峻によって描かれた対岳楼水墨画が現存し¹¹、当時の面影を伝えている。

この別天地で采蘋は、島原・天草の乱に思いをはせながら、また対岳楼の往時の有り様を見事に活写している。

衆芳亭¹²

愛客家風情亦深	客を愛す 家風 情亦た深し
兄弟不遠日相尋	兄弟 遠からず 日び相尋ぬ
亭稱衆芳予付度	亭は 衆芳に称ひて予め付度す
花萼相映肚芳心	花萼 相映じて 肚は芳心
朋自遠方多名士	朋は 遠方より 名士多し
来遊誰不留芳吟	来遊し 誰か芳吟を留めざらん
予亦尋芳得所託	予亦た 芳を尋ねて 託す所を

¹⁰ 天草文芸会編『天草の史談と文芸・第30号』、2013年6月、P1～P2。

¹¹ 鶴田文史氏所蔵。

¹² 永野氏の別邸か。

歳暮陰陽屬索莫
主人胸次元豁如
暫停行李應不惡

地靜短日稍覺長

出門散步統村落
雲在天半縱舒卷
蘭託幽谷人不鋤
欽君能脫官途役
閑居晏然興有餘
朝暮奇觀供吟目
蜃樓漁火鮫客居
海若秋驕潮頭雪
老蜂夕吐鰲背月
天造地設自有私
偏於此鄉鐘奇絕
四顧縹緲心魂迷
坐覺身得長生訣
不然尋常火食人
何由来遊神仙屈

既已爲仙不可疑

月中姮娥蹤可追
主人在側一大笑
君今老狂欲何爲

浪遊有待依人達

仙凡霄壤難等期
不如飲我丹釀酒
消却頭上雪成堆
此時頃悟耄已及
總是顛倒遺嘲嗤

得たり

歳暮の陰陽 索莫に属ふ
主人の胸次 元と豁如なり
暫く行李を停むるも 応に悪しからざるべし

地靜かにして 短日 稍く長きを覺ゆ

門を出て 散歩し 村落を統る
雲在りて 天の半ば舒卷に縦ふ
蘭を幽谷に託して 人は鋤かず
君能く官途の役を脱するを欽ぶ
閑居 晏然として 興余り有り
朝暮の奇觀 吟目に供ふ
蜃樓の漁火 鮫客の居
海は 秋の驕るが若し潮頭の雪
老蜂 夕に鰲背の月を吐く
天造 地設 自ら私有り
偏に此の郷 奇絶を鐘む
四顧すれば縹緲として心魂迷ふ
坐して覺ゆ長生の訣を得たりと
尋常は然らず 火食の人
何に由りてか 神仙の屈に來遊せん

既に已に 仙と爲るを疑ふべからず

月中の姮娥 蹤を追ふ可し
主人 側に在りて一たび大笑す
君 今 老ひ狂ひて 何をか為さんと欲す

浪遊し 人に依りて達せんことを待つ有り

仙凡霄壤等しく期せんこと難し
我飲むに如かず 丹釀の酒
頭上 雪の堆を成すを消却す
此の時頃かに悟るも耄已に及ぶ
総て是れ 顛倒 嘲嗤を遺る

○衆芳 良い香り。多くの花。優れた人物や美人のたとえ。○付度 人の心を思いやる。おもい図る。○花萼 花のつぼみを保護する緑色の外皮。○芳心 女性の物思い。女ごころ。○得所 身の置き所を得

る。その人にふさわしい地位・場所を手に入れる。
 ○索莫 ものさびしいさま。荒れ果てたさま。○胸次 胸の内。胸中。○豁如 度量が大きいさま。○行李 旅行する人。○舒卷 時勢や物事に応じて進退し、身を処す。時に随って進退すること。○晏然 安らかな様子。落ち着いているさま。○奇觀 素晴らしい眺め。○蜃楼 蜃気楼。○鮫客 伝説の人魚。鮫人。○鰲背 鰲は、鼈の俗字。鼈は、大うみがめ。その背には、神仙の山を載せると伝える。「渤海之東、云云、有大壑焉、云云、其中有五山、而五山之根、無所連著、常隨波上下往還、云云、帝恐流于西極、云云、使巨鼈十五舉首而載之。」『列子』『湯問』○客居 旅先での仮住まい。○海若 海神の名。北海の神。○縹緲 とおくかすかなさま。遥かに遠いさま。風や水に従い、漂う様。○火食 日常の食事。○仙凡 凡は、凡の異体字。仙界と俗界。○霄壤 天と地。○耄 年をとって体力や気力が衰える。○顛倒 さかさまになる。○嘲嗤 あざけり笑う。

觀濤園¹³

荅洲東南御所浦	荅洲の東南 御所の浦
傳言古帝駐蹕處	伝へ言ふ 古帝 駐蹕の処
往事茫茫不可尋	往事 茫茫として尋ぬべからず
裊海環嶋別區宇	裊海 嶋を環り 区宇を別つ
聞君命園曰觀濤	君に聞く 園を命けて 觀濤と曰ふを
波間繡錯幾島嶼	波の間 繡錯す 幾島の嶼
唯我得聞不得看	唯だ我 聞くを得るも 看るを得ず
文章安能起波瀾	文章 安んぞ能く波瀾を起さん
雖然羈遊遍天下	然りと雖も 羈遊 天下に遍し
東海曾經得壯觀	東海 曾て 壯觀を経得たり
猛風驟發陽侯怒	猛風 驟に発し 陽侯怒る
吼哮萬里浪漲天	吼哮 万里 浪は天に漲る
督如長鯨蹴波躍	長鯨の如く督みて 波を蹴って躍り
轟如三軍驅車前	三軍の如く轟きて 車を駆って前む
百丈銀山捲雪立	百丈の銀山 雪を捲りて立つ

六鷁退飛不能旋
 魚鼈失勢龍離窟
 溪溪蒲伏各連延
 橫暴之極風亦死
 餘波漸歛海如眠
 水天一色雲無跡
 堪賞潮頭月嬋娟
 觀賞古來八月望
 庚公清興枚乘賢
 此事有一可無二
 君獨何幸占兩全

六鷁 退飛し 旋ること能はず
 魚鼈 失勢し 龍は窟を離る
 溪溪たる 蒲伏各おの連り延ぶ
 橫暴の極み 風亦死す
 余波 漸く歛めて海は眠る如し
 水天 一色 雲の跡無く
 賞するに堪ふ潮頭月は嬋娟たり
 觀賞す 古來 八月の望
 庚公の清興 枚乗の賢
 此事 一有りて二は無かる可し
 君独り 何んぞ幸ひにも 兩全を占めんや

○駐蹕 天子が行幸の際、車を止めてその地に一時留まる。○裊海 小さい海。ここは有明海。○繡錯 めいとりのように交わる。○陽侯 水神の名。転じて波をいう。○三軍 大軍をいう。○區宇 天下。宇内。御殿。○吼哮 獣が大声で叫ぶ。○蒲伏 腹ばいになる。○六鷁 鷁は水鳥。鷁が強風のため押し返されてしまうのは凶兆とされた。「六鷁退飛、過宋都。〔杜預注〕鷁、水鳥。高飛遇風而退。宋人以爲災、告於諸侯、故書。』『春秋左氏傳』僖公十六年 ○魚鼈失勢 魚とすっぽんが水の勢いの前に気力をなくしてしまう。枚乗「七發」(『文選』卷三十四)を踏まえる。「橫暴の極、魚鼈失勢、顛倒偃側。枕枕浚浚、蒲伏漣延。〔注〕枕枕浚浚、魚鼈顛倒貌。蒲伏、即匍匐也。」○蒲伏 匍匐。○嬋娟 月の光が明るいさま。○枚乗 (?～前 140) 前漢の文人。辞賦盛行の先駆けをなし、また美文で知られる。

冬至夕抱雪主人歸自阿村喜而賦	冬至の夕、抱雪主人阿村 ¹⁴ より歸る。喜びて賦す。
来遊知幾日	来遊して 幾日かを知る
節序屢相移	節序 屢し相移りて
盟主旋歸日	盟主 旋歸の日
一陽来復時	一陽 来復の時
團爐煨斗酒	団爐 煨斗の酒あり
剪燭展雙眉	燭を剪り 双眉を展ぶ
相看心降處	相見て 心を降す処

¹³ 天草上島御所浦島の庄屋の屋敷か。

¹⁴ 熊本県上天草市松島町阿村。

坐忘別後思 坐して忘る 別後の思ひ

○節序 季節が移り変わる順序。○旋帰 もとに戻る。○展雙眉 展眉は愁眉を開くこと。

至日即興

荅州氣候寒威薄 荅州の氣候 寒威薄し
楊柳蒼然葉未落 楊柳 蒼然として 葉未落つ
檢歷始知方冬至 歷を檢りて 始めて 方に冬至を知る
主客團欒擁爐酌 主客の団欒 炉を擁する酌あり

○寒威 非常に厳しい寒気。○歷 曆に同じ。○擁爐 火鉢を囲む。

偶興

海郷食有魚 海郷 食に魚有り
誰敢嘆歸歟 誰か敢へて 帰るを嘆んや
我則異於是 我則ち 是において異れり
君家滿架書 君が家 架書に満つ

牧山眺望

未知窮途哭 未だ 窮途に哭くを知らずして
臘月尋詩境 臘月 詩境を尋ぬ
石徑繞溪聲 石徑 溪声を繞りて
山行似螺影 山行 螺影に似る
縦目望四州 目を縦にして 四州を望めば
脚下俯郷井 脚下 郷井を俯す
南北挾明鏡 南北 明鏡を挾みて
環海列翠屏 環海 翠屏を列ぬ
群帆去又來 群帆 去り又た来りて
風日殊安靖 風日 殊に安靖なり
蛾眉鏡湖中 蛾眉 鏡湖の中にありて
爲誰試妝靚 誰が爲にか 妝靚を試さん
嶋嶼各秀靈 嶋嶼 各おの秀靈にして
位置真画景 真画 景に位置す
應接奪吟魂 応接 吟魂を奪はれ
妙思莫由騁 妙思 騁す由莫し
自非八斗才 自ら 八斗の才に非ざれば
下筆恐螟蝗 下筆 螟蝗を恐る
竟日看不足 竟日 不足を見るに

歸路尚引領 歸路 尚ほ 引領す

○窮途哭 晋の阮籍が車で出かけ、道の通じない所に至って、痛哭して引き返した故事による。貧困の悲しみをいう。「時率意獨駕、不由徑路、車跡所窮、輒慟哭而辺。』『晉書』「阮籍傳」○臘月 陰曆十二月。○山行 山中を歩く。○縦目 遠望をほしいままにする。○鏡湖 浙江省紹興県にある湖。ここは蛾眉を受け、化粧鏡の意とした。○妝靚 化粧する。よそおい飾る。○八斗才 詩文の才に富むこと。宋の謝靈運が、魏の曹植を評した語。「宓妃愁坐芝田館、用盡陳王八斗才。」李商隱「可歎」○下筆 詩文を作る。○螟蝗 害虫の名。ここは世に害毒を齎すものになっていないか恐れる。○引領 遠くを眺めのぞむ。

歸自牧山迂路（採）梅 牧山より帰る迂路梅を採る

矮屋肅然三兩家 矮屋 肅然たり 三兩の家
山行目擊早梅花 山行 目撃す 早梅の花
歸來要折一枝去 帰り来て一枝を折て去むと要む
荊棘叢中綫路斜 荊棘 叢中 線路斜なり

○矮 低い。○荊棘 いばら。○綫路 細い道。

王階春色

蛾眉畫罷侍君王 蛾眉 画くを罷めて君王に侍る
玉樹無枝不向陽 玉樹 枝無く 陽に向はず
妝閣人稀春晝永 妝閣 人は稀にして 春晝永し
鳴逐伴弄韶光禽 鳴きて逐ひ伴ひて弄ぶ韶光の禽

○蛾眉 美人の眉。美人。○妝閣 化粧部屋。婦人の部屋。○韶光 美しい春のさま。

蘭竹

楚澤多芳草 楚沢 芳草多し
就中蘭最芳 就中 蘭 最も芳し
風波滿人海 風波 人海に満ち
何去此君傍 何ぞ去かん 此れ君が傍に

○楚 いばら。

上有倒懸竹 上に有り 倒懸の竹
 下有幽獨蘭 下に有り 幽独の蘭
 凌霜又含露 霜を凌ぎ 又露を含みて
 真入波老看 真に入る波は老いて看ゆ

○凌霜 霜に耐えることをいうが、人物の節操の高いことにもいう。○倒懸 体を逆に吊るす。極めて苦しい立場にあることのたとえ。

歳暮感懷用陸放翁韻四首 歳暮、陸放翁の韻を用ひて感懷す。 四首

欲梳飛蓬首 飛蓬の首を梳らんと欲して
 獨坐明鏡前 独り坐す 明鏡の前
 絲絲難遮老 糸糸 老を遮り難く
 多愁六十年 多愁 六十年
 心事似蒸沙 心事 蒸沙に似て
 灰死何時然 灰死 何の時にかならん
 乖違伯氏託 伯氏の託せるに乖違し
 空嗟日月遷 空しく日月の遷るを嗟く
 倒行且逆施 倒行し 且つ逆施す
 暮年愈狂顛 暮年 愈いよ狂顛なり
 清白吏子孫 清白なる 吏の子孫
 敢忘窮益堅 敢て忘れんや窮して益ます堅なるを

○飛蓬 乱れた髪の毛をいう。○絲絲 細かいものを形容する。「素髮絲絲不滿梳、衰容覽鏡衰容覽鏡已非吾。」文徵明「素髮」○蒸沙 蒸した沙で飯をつくるように不可能なことの喩え。「是故阿難若不斷姪、修禪定者、如蒸沙石、欲其成飯、經百千劫、祇名熱沙。何以故。此非飯、本沙石成故。」『楞嚴經』卷六
 ○灰死 心が静止して動かないことの喩え。「灰死如我心、雪白如我髮。」白居易「送兄弟迴雪夜詩」○伯氏 長兄白圭のこと。○狂顛 精神異常。行動がでたらめで節操がないこと。○清白吏 清廉潔白な官吏。東萊太守となった楊震は断り、後世に潔白の官吏の子孫と言われるようにするのが、子孫への最大の遺産だと言った故事にちなむ。ここでは、清廉であった父の古処をいう。「性公廉不受私謁、子孫常蔬食步行、故舊長者、或欲令為開産業、震不肯曰、使後世稱為清白吏子孫、以此遺之、不亦厚乎。」『後漢

書』「楊震傳」

この詩は題にもある通り、陸放翁の「歳暮感懷」十首の韻を用いて、自らの心中の思いを述べたものである。六十年の人生を静かに振り返り、兄のこと、父のことに言及している。

其二

義娥不與居 義娥 居を与にせず
 客心獨惆悵 客心 独り惆悵す
 有志乏才学 志有れども 才学乏し
 惘然未絶望 惘然として 未だ絶望せず
 身是先人遺 身是れ 先人の遺せり
 老健幸無恙 老健 幸ひ恙が無く
 営営何所求 営営として 何れの所にか求めん
 唯恐斯文喪 唯だ恐る 斯文の喪へるを
 紙田筆為鋤 紙田 筆 鋤と為す
 日耕書幾行 日び耕し 幾行かを書す
 時側焦原足 時に側け 焦るるも 原と足る
 區區守直諒 句句として 直だ諒を守る

○義娥 義和と嫦娥。日月をいふ。「孔子西行不到秦、〔注〕義娥、日月也、義和、日御、嫦娥、月御。韓愈「石鼓歌」○惆悵 失意・失望により悲しみもだえるさま。○惘然 気にとめないさま。○老健 老健に同じ。年老いて体が健やかなこと。○営営 休まずに励むさま。○紙田 紙に字を書くのを田を耕すことに喩える。○區區 心を尽くすさま。○直諒 正直と誠実。「友直、友諒、友多聞、益也。」『論語』「李氏」

この詩も、自分の身を振り返り、老いても尚、父の遺命を心に懸けていることを詠っている。

其三

未慣塵俗態 未だ慣れず 塵俗の態
 交結烟霞徒 交結す 烟霞の徒
 譬如冥々鳥 譬ふるに 冥々たる鳥の如し
 無復弋者虞 復た 弋は 虞ること無し
 經歷愛茶州 經歷して 茶州を愛す
 境幽風景殊 境幽にして 風景殊にす

質朴人情厚 質朴として 人情厚し
 可以養吾迂 以て 吾が迂を養ふ可し
 凜々歳将晏 凜々として 歳将に晏れんとす
 圍爐一事無 爐を圍みて 一事無し
 何必問仙丹 何んぞ必らずしも 仙丹を問はんや
 安逸長年途 安逸す 長年の途に

○譬 たとえ。○冥々鳥 冥々は暗くかすかなさま。
 「漠漠帆來重、冥冥鳥來遲。」韋應物「得暮雨送李曹」
 ○弋 いぐるみ。糸をつけた短い矢。○交結 つき
 あう。ぐるになる。交錯してつながる。○迂 世間
 にうとい。○凜々 寒いさま。○仙丹 飲むと仙人
 になるという薬。

この詩は一転し、天草の人々の人情の厚さを享受し、穏やかな歳の暮れを迎えつつ、長旅の疲れをいやしている様子が伝わってくる。

其四

子媳雖事殊 子媳は 事ふること殊なりと雖ども
 敢讓世濟美 敢て讓る 世の濟美
 曾感木蘭義 曾て感ず 木蘭の義
 緩急當加此 緩急は 当に此に加はるべし
 陳言辭父兄 陳言して 父兄に辞す
 中夜獨興起 中夜 独り興起る
 東遊二十年 東遊 二十年
 倦遊志未已 遊びに倦みて 志 未だ已まず
 持書藏名山 書を持して 名山に藏せども
 此身死不死 此の身 死するや死なずや
 世人漫冷笑 世人 漫りに冷笑するも
 他日看終始 他日 終始を看ん

○媳 嫁。○濟美 先祖の立派な事業を受け継ぎ、発展させる。○木蘭義 木蘭詩 古樂府の詩題。老病の父に代わって娘の木蘭が男装して従軍、軍功をあげ帰還したことを歌う。南北朝時代の民謡に由来するとされる。○緩急 ゆっくりしているさまとあわただしいさま。緊急の事態。異常が発生する時。○陳言 述べられた言葉。○中夜 よなか。○持書藏名山 「僕誠以著此書、藏諸名山、傳之其人、通邑大都、則僕償前辱之責、雖萬被戮、豈有悔哉。」司

馬遷「報任少卿書」

この詩も自分の身の上を振り返り、宿願である父の遺言を未だ果たしていないことを悔やんでいるが、結句に「世人漫りに冷笑するも、他日終始を看ん」と結ぶことで采蘋の決意が示されている。

雜詠以孟浩然句為韻效陸放翁 十首 雜詠、孟
 浩然的句を以て韻と為し、陸放翁に效ふ。十首
 落日懸帆檣 落日 帆檣に懸りて
 歸雲擁山郭 歸雲 山郭を擁す
 烟橫認晚炊 烟横たはり 晚炊を認むれば
 屋潤知民莫 屋は潤ひて 民莫きを知る
 静坐遊目轉 静坐して 遊目を転ずれば
 舟行殊不惡 舟行 殊に惡からず
 歸來烟霞語 歸り来て 烟霞の語あり
 翩々紙上落 翩々として 紙上に落つ

○帆檣 帆柱。○屋潤 家が富むこと。「富潤屋、徳潤身。』『禮記』『大學』○遊目 気ままに眺める。ゆるゆると楽しみながら見渡す。○舟行 舟で行く。「舟行自無悶」孟浩然「早發漁浦譚」○翩々 ひらひらとゆれ動くさま。

其二

澹泊常無爲 澹泊 常に為す無く
 逍遙入蔗境 逍遙して 蔗境に入る
 氷堅断泉聲 氷堅くて 泉声を断ちて
 月外落人影 月外に 人影落つ
 母牛將犢歸 母牛 犢を將きて帰り
 牧童汲山井 牧童 山井を汲む
 井上梅花笑 井の上 梅花笑ひて
 黄昏一段景 黄昏 一段の景あり

○澹泊 あっさりして無欲なさま。○蔗境 ものごとの味わいがあとになるほどよくなること。○泉聲 泉の流れる音。○犢 こうし。

其三

農夫勒稼穡 農夫 稼穡を勒して
 山田和雪鋤 山田 雪鋤に和す

孜々無早夜　孜々として　早夜無く
 不復知年餘　復た年余を知らず
 遊民僧飽暖　遊民と　僧は暖に飽き
 膏血廣大居　膏血もて　大居を広くす
 瞞人以佛法　人を瞞すに　仏法を以てし
 未曾讀佛書　未だ曾て　仏書を読まず
 　以佛法一作貪福田　　仏法を以て一作、福田貪し

○稼穡　作物の植え付けと取り入れ。○孜々　勤勉に努め励むさま。一心に集中するさま。○膏血　人民が苦勞して得た利益。○福田　福德を齎す下地の意。三法を敬い、父母の恩に報い、貧者・病者を哀れむなどの善行を施すこと。その結果として福德が生ずるのを、田が作物を生みだすのに喩えていう。

其四

天下昇平久　天下　昇平久しく
 山巔披柴荊　山巔　柴荊を披く
 耕耨勞四體　耕耨　四体を勞し
 凡百待西成　凡百　西成を待つ
 庭砌蕪不掃　庭砌　蕪して掃かず
 梅花為誰清　梅花　誰が為にか清し
 日夕人未歸　日夕　人未だ帰らざるに
 老翁茶自烹　老翁　自ら茶を烹る

○耕耨　田畑の雑草を除き耕作する。○凡百　すべての。さまざまな。

其五

白鷗馴海客　白鷗　海客に馴れ
 無心立釣磯　無心に　釣磯に立つ
 舟過鳴一聲　舟は過ぎりて　鳴くこと一声
 似待漁翁歸　漁翁の帰るを待つに似たり
 怪鳥不知名　怪鳥　名を知らねども
 一鷲驚人飛　一鷲　人を驚かして飛ぶ
 羈宿離深樹　羈宿　深樹を離れ
 啾々噪落暉　啾々として　落暉に噪ぐ

○怪鳥　見知らない鳥。○啾々　鳥の鳴き声。○落暉　夕日。落日。

其六

我既無家客　我既に　家客無く
 羈旅意自平　羈旅　意自ら平らかなり
 青年遺愛孤　青年　遺愛の孤
 白髮老書生　白髮　書生老ひたり
 諾貴千金重　貴きを諾へば　千金重く
 遊便一箇輕　遊便　一箇輕し
 隨處尚友在　隨處に　尚ほ友在りて
 播帙床上横　帙を播く　床上の横

○家客　食客。居候。○孤　孤兒。○帙　書物。

其七

白盡溪南梅　白尽す　溪の南梅
 耐寒度野橋　寒さに耐えて　野橋を渡る
 巽二催膝六　巽二は　膝六を催す
 風簷集霰跳　風簷　霰の跳るを集む
 杪冬人事迫　杪冬　人事迫りて
 光景日蕭々　光景　日蕭々たり
 最是堪畫處　最も是れ　画くに堪ふ處
 披蓑出浦橈　蓑を披りて　橈は浦を出す

○巽二　風神の名。「蕭至忠爲晉州刺史、將獵、前一日有老麋祈於玄冥使者、使者令祈於東谷四巖、巖四日、若令膝六降雪、巽二起風、不復獵矣、天未明、風雪大作、至忠不出。」『幽怪録』○膝六　雪神の名。○簷　のき。ひさし。○杪冬　冬の終わり。○浦　舟を停泊させる港。○橈　かじ。船。

其八

溪山盈尺雪　溪山　盈尺の雪
 村舍渾似洞　村舍　渾て洞に似たり
 過客棄我行　過客　我を棄てて行くに
 何堪客中送　何んぞ堪へん　客中に送らるるを
 娛樂跡難留　娛樂　跡を留め難く
 瞥然如春夢　瞥然として　春夢の如し
 聊遣一時興　聊か　一時の興を遣れば
 筆硯剔燈弄　筆硯　剔燈を弄す

○盈尺　一尺あまり。○過客　旅人。○瞥然　突然。ぱっと。素早いさま(白居易・与微之書)。○遣興　気

晴らしをする（杜甫・詩・可惜）。○剔燈 燈心をかきたてる。

其九

坐覚寒威迫 坐して覚ゆ 寒威迫るを
門前雪漲溪 門前の雪 溪に漲る
客來振鶴氅 客来りて 鶴氅を振ひて
舟過起鳧鷖 舟過ぎり 鳧鷖起つ
呼盃傾琥珀 盃を呼びて 琥珀を傾け
煎茗碎玻瓈 茗を煎じて 玻瓈を碎く
庭竹寂無聲 庭竹 寂として声無く
強項為誰低 強項 誰の為にか低れん

○鶴氅 鶴の羽根で織った外とう。○鳧鷖 かもともかもめ。○茗 茶。○玻瓈 水晶。明るい空。酒。杯。○強項 軽々と人に頭を下げない。容易に人に屈しないさま。

其十

綽々有餘裕 綽々として 余裕有り
客路避寒暑 客路 寒暑を避く
老衰主養生 老衰 主に養生す
天寒欲凍雨 天寒く 雨凍らんと欲す
書就不識家 書 就くも 識家ならず
学感老婆杵 学びて感ず 老婆の杵
朝暮抄讀餘 朝暮 読余に抄して
閒吟歩烟渚 閒吟 烟渚を歩く

○綽々 ゆったりと余裕のあるさま。落ち着いたさま。○讀餘 読書三余は読書に都合のよい暇な時間。歳の余、日の余、時の余の三つ。

上記の十首は天草でのゆったりとした滞在の中で、人々の暮らしや、冬の情景を心情とともに描写したものである。人生の最晩年を過ごした天草での日々の暮らしが、余裕のある豊かなものであったことを窺わせている。同時に采蘋の詩作も究極の域に達している観がある。

4.おわりに

以上、安政三年暮れまでの天草で詠まれた詩を見

てきた。この後も翌年三月末に鹿児島に渡るまで志柿に滞在するのだが、長期滞在の理由を「歳暮感懷用陸放翁韻四首のうちの其三」に「經歷愛芥州、境幽風景殊、質朴人情厚」という詩句に述べている。筆者は最近、天草を取材してこの詩句通りの人情を体験した。天草人の人情の厚さは現在でも健在である。

ではなぜ采蘋が天草に渡ったのか。その理由を「呈佩川草場翁余曾在江都訪穀堂先生先生見示草場翁詩故及」に「偶因外弟來天草」と書いているが、外弟とは誰のことをさすのか。この理由の他にも天草には采蘋を誘致した多くの要因があった。そのひとつは文政元年（1818）の頼山陽の九州旅行であった。山陽は長年の願望であった長崎訪問を、父の三回忌法要のため広島に帰省したのを機に実行したのである¹⁵。その後、天草、熊本、鹿児島と回り、竹田の田能村竹田、日田の広瀬淡窓を訪ねて約九ヶ月間の九州遊歴を果たした¹⁶。采蘋の九州遊歴の道程は山陽のそれとは重なってはいないが、訪問先は重なっている場所もある。もちろん、江戸時代の文人が遊歴の先々で宿泊した場所は、地方の裕福な文雅を好む特定の人々に限られていたので、自ずから重複してくるのだが、采蘋は文政八年～九年にかけて京都に滞在し、おそらくこの時山陽に面会しているはずである。九州から帰った山陽と、同じく長崎に滞在した経験のある采蘋が、話題を一にしたことは想像に難くない。また九州遊歴の話は、まだ経験のない采蘋にとっては興味を引く話題であったろう。

この他にも九州各地には広瀬淡窓の門人や亀井南冥の門人が多くいたことも采蘋にとって居心地の良い旅であったことと思われる。

このたびの天草の取材では天草史談会の鶴田文史氏に多くのご教示を賜った。詩中の人物・場所に関しての情報を提供していただき、天草での詩を理解する上で大きな進歩であった。天草の詩は引き続き紹介していきたいと考えている。

(Received: January 22, 2015)

(Issued in internet Edition: February 6, 2015)

¹⁵ 拙稿（学位論文）15頁参照。

<http://hdl.handle.net/11263/230> (2015/01/19)

¹⁶ 橋本正勝著『頼山陽と熊本展』図録